

## 第十五回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

長部 日出雄 著『櫻桃とキリスト もう一つの太宰治伝』

(2002年3月30日 文藝春秋 刊)

**長部 日出雄** おさべ ひでお 昭和9年(1934)生まれ。青森県出身。

作家。早稲田大学文学部中退。週刊誌記者、フリーライター、映画評論等の仕事を経て、小説を書き始める。『津軽世去れ節』、『津軽じょんから節』で直木賞、『鬼が来た 棟方志功伝』で芸術選奨文部大臣賞、『見知らぬ戦場』で新田次郎文学賞を受賞。また、1989年に映画監督作品『夢の祭り』を完成。著作は、近作に『天皇はどこから来たか』、『反時代的教養主義のすすめ』、『二十世紀を見抜いた男 マックス・ヴェーバー物語』、『辻音楽師の唄 もう一つの太宰治伝』がある。

### 受賞のことば

戦後間もないころ、新制弘前高校の放課後の哲学講座で、『人間の学としての倫理学』の内容について教えられました。哲学研究クラブの顧問教師小田桐孫一先生が、東京帝大文学部倫理学科で師事した和辻哲郎教授に傾倒して、生涯にわたる影響を受けていたからです。

当方も小田桐先生の感化によって、和辻哲郎の『風土』『古寺巡礼』『鎖国』などの名著に若いころから親しみ、無類の文明批評に強く触発されてまいりましたが、近年ますます思想家としてのスケールの壮大さに感銘と敬意を深めつつありましたので、今回の受賞はまことに光栄に存じ、感謝に堪えません。

小田桐先生にとって私は不肖の弟子であり、ずっと心配と迷惑のかけ通しでした。きっと今回の受賞をいちばん喜んでおられるのは、小田桐先生でしょう。こんど弘前へ帰った折には、なによりもまず小田桐先生のお墓にお参りして、このおもいもかけなかった吉報を報告したいとおもいます。

### 《選考委員評》

貴重な文献

陳 舜臣

毎年、年末から年始にかけて、和辻哲郎賞の候補作を抱えているので、なるべく旅行をしないようにしていた。今年は年末年初に台湾の大学に出講しなければならぬのに、わりあいに気はらくであった。連載中にすでに読んでいた作品がかなりあったからである。

連載中に切れ切れに読むのと、まとめて読むのとでは、ずいぶんかんじがちがう場合がある。ときにはこれが同じ作品かと疑うこともあったようだ。

長部日出雄氏の『櫻桃とキリスト』は連載に四百枚加筆されたものだが、それはこの作品の流れの主調をいささかも変えていない。私たちの世代は、どうしても「天才」太宰治の呪縛を解くことができない。なぜならこの天才は私たちの遠くにいるのではなく、ごく近くにいるからである。しかも私たち俗人よりもっと俗な生活をすることもあった。麻薬中毒になることもあり、精神病院に入院することもあった。それも含めて太宰治は天才であった。

多角の天才児太宰治は、どの角度からも書けるという意味では、書きやすい対象であり、それだけではすまないという意味では書きにくい対象である。「もう一つの太宰治伝」という副題を前作『辻音楽師の唄』につづいて、この作品でも用いている。私はこれを長部日出雄氏の謙遜と受取っている。

津島美知子さんの、天と地を揺るがすほどの慟哭の声でしめくくったのだから、しばらくはこれをこえる太宰治伝は出ないであろう。

つぎはこの世代をえがくのに、太宰治がいかにかに引用されるか、美知子さんのうけついでテキストを、正しく伝える一つの文献となることを願ってやまない。

梅原 猛

私は、今年候補になった五作品のうち、長部日出雄氏の『桜桃とキリスト もう一つの太宰治伝』がそのできにおいて一番で、強くこの作品を推したいと思ったが、この作品が大佛次郎賞という大きな賞をすでに受賞しているので、それをどう考えるかが若干心にかかった。しかし他の選考委員は重賞もかまわないという意見であったので、すんなりこの作品に決まった。

太宰治は玉川上水での心中事件によって大いに耳目を集め、太宰文学が論じられるときにはこの事件が評価の障害になったが、長部氏のこの著書によってやっと太宰文学が心中事件を離れて客観的に論じられるようになったとってよいであろう。

長部氏は太宰治と同郷の作家であり、太宰治を深く尊敬し、太宰治の文学を愛読した。長部氏は、彼を若き日に夢中にさせた太宰についてこの書で深く問うのである。この書は、あらゆる資料を読み、太宰の人生と関わったいろいろな人に直に面接して、太宰のことを聞いて書かれたものであろうが、全編に太宰治とは何ぞやという問いが、自己とは何ぞやという問いとからんで、一本はっきりした線として貫いている。

私も同感であるが、長部氏は『富嶽百景』や『走れメロス』や『お伽草紙』などの戦争中に書かれた作品をもっとも高く評価する。そしてそれは賢明でかつ貞淑な美知子夫人との結婚のおかげであるとする。彼女との結婚のためにそれまでの自堕落な生活を反省し、身を慎んだ時代の太宰の作品がもっともよい。当然、流行作家となった戦後の彼の乱れた生活には批判的であり、太宰のイエス＝キリストによって自己弁解を行なおうとする態度に対しても、それはキリスト教の誤解にすぎないという。

この作品を読んでいちばん喜ばれたのは美知子夫人であろう。太宰の骨を穴に入れた後にそっと号泣する美知子夫人を描いた一文はもっとも感動的である。芥川龍之介は「ユゴーの全作品よりボードレールの一行」といったが、「美知子夫人の号泣の声を聞いた」という一行はまさにそのような一行であろう。

中野 孝次

候補作五点を読み了って、わたしは今年は迷うことなく一点を推す判断がついた。すなわち長部日出雄「桜桃とキリスト」である。これが他の四作に断然抜き出していると思った。

作家研究の方法として昔から最もよくないとされてきたのは、伝記を片手にテキストを読み、テキストを片手に伝記を探るというやり方である。ところが長部氏が太宰治に迫るために用いたのは、まさにこのよくないとされた方法である。にもかかわらず、それが太宰治という文学者像を描く場合には最適の方法であることを長部氏のこの評伝は示しているのに、わたしは感歎した。

その理由の一つしかない。長部氏の太宰治を愛することの深さ、関心の持続、研究の周到さがそれである。

わたしは何よりも長部氏の太宰文学の読みの深さに感歎した。決して激せず、やわらかく、平静に、太宰文学の文章の急所をときほぐしているのが、わたしのように太宰文学の門外漢である読み手にも、太宰の個性と魅力はよくわかった。

さらにもう一つ驚嘆したのは、太宰治の伝記的事実の調査の徹底して行きとどいていることである。現在までに太宰治の伝記的研究は呆れるほど多く発表されているが、おそらくそれらの全部に目を通して、生涯のときどきを調べ、その中に太宰を置き、その中からどうやって作品が生みだされたかを、氏は克明に追っていく。ために読者はあたかも生ける太宰治を目のあたりさながら、その文学創造の現場に立ちあう思いがする。

そういう意味でこれは、伝記を片手に作品を、作品を片手に伝記を探るというタブーを逆手にとったやり方で初めて達成された、すぐれた太宰治論である。論というより、太宰治の作品と伝記をもとに描きあげた、太宰治を主題とする文学の傑作と言ってよい。

だからこそ、選考の時に既に他の賞を受賞していたにもかかわらず、三委員ともがこれを推したのであった。